

医療ルネサンス

No.5780



股関節脱臼

1/5

乳幼児健診 見過ごし増加

「なんだか歩き方がおかしいみたい」

長野県山形村の柴田佐知子さん(37)は、1歳2か月で歩き始めた次女、心愛ちゃん(2)の様子を見て不安になった。「まだ小さいから筋力が弱いだけ」。そんな周囲の声に自分を納得させていたころ、通い始めた保育園で保育士に尋ねられた。「心愛ちゃん、脚どうかしたの?」

それをきっかけに、信濃医療福祉センター(同県下諏訪町)で小児整形外科医の診察を受けた。「先天性股関節脱臼です。赤ちゃんの時にわかれば治りやすかったのですが、今からだと治療に難渋するかもしれない」。昨年5月、1歳5か月の時だった。



蓋から外れる病気で、生まれ持った素因と出生後の環境が重なって起きると考えられている。生まれた時に異常がなくても、おむつや衣服の締め付け、抱き方などにより、後になって外れることもある。

心愛ちゃんは、ベッドに横になり右脚に重りを付けるなどして引く張る「牽引療法」を2週間受け、筋肉を柔らかくして大腿骨の位置を治しやすくしてから、関節をはめて腰と脚をギプ

腰から脚にかけてギプスで固定されていた時の心愛ちゃん。母の佐知子さんは「もっと早く見つかってれば」と話す

スで固定した。股関節が安定するには時間がかかり、ギプスが取れたのは昨年12月。今年1年間は装具をつけて過ごす予定だ。

小さい子にはどんなにつらいことか。もっと早くわかっていれば」と嘆く。

先天性股関節脱臼は、日本では1970年ごろまで100人に1人くらいの割合で見られたが、予防啓発が進み、今では1000人に1〜3人程度。ところが、それに伴い、この病気をよく知る医師が減って乳幼児健診で見つかりにくくなり、歩き始めてようやく診断される子が増えてきた。

日本小児整形外科学会が今まとめた全国調査の結果によると、2011〜12年度に診断された子どもの6人に1人が1歳以降の診断で、ほとんどが乳幼児健診を受けていたの見過ごされていた。

同センター所長の朝貝芳美さんは「生後3、4か月なら多くは通院で治せるが、1歳過ぎまで診断が遅れると入院治療や手術が必要になる子も増える。健診で問題を見逃さないことが大切だ」と訴える。

(このシリーズは全5回)

「病院の実力 女性の病気、子どもの病気」が発売中。一般書店と読売新聞販売店で扱っています